

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2016.10) 平成27年度:53.

人工肛門を造設した大腸がん患者の心理的適応過程

中村 一美, 青沼 佑未子, 稲葉 留奈, 田平 有子, 谷尻 美
貴

人工肛門を造設した大腸がん患者の心理的適応過程

キーワード：大腸がん、人工肛門造設、心理的適応過程、社会的役割

○中村一美 青沼佑未子 稲葉留奈 田平有子 谷尻美貴

旭川医科大学病院 6階東ナースステーション

I. 研究目的

人工肛門を造設した大腸がん患者が手術後から退院までにどのように自分の状態を認知し、心理的に適応しているのかを明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究対象者

大腸癌に罹患し、人工肛門造設を決定した患者 4名。(男性 2名、女性 2名)

2. 調査期間：2014年9月～10月

3. 研究デザイン：質的記述的研究

4. データ収集・分析方法

- 1) 診療録・看護記録（アセスメントデータベース・SOAP 記載）から情報収集する
- 2) ①手術後の気持ちの変化②手術後に辛かったこと③辛かったことと向き合えた要因について半構成的面接法でインタビューを実施した。

III. 倫理的配慮

本研究の趣旨・方法・プライバシーの厳守について口頭と文書を用紙で説明した上で、書面により同意を得た。本研究は研究者の所属する倫理委員会の承認を得て実施した。

IV. 結果

対象者の概要

A氏 50歳代女性 人工肛門造設術施行、B氏 60歳代女性 人工肛門造設術施行、C氏 40歳代男性 腹会陰式直腸切断術＋人工肛門造設術施行、D氏 70歳代男性 高位前方切除術＋人工門造設術施行。

本研究では6の主要カテゴリー、24のサブカテゴリーと102のコードに分類した。

術後は安静度の解除やドレーン類からの解放を感じることで【術後の身体症状が緩和】していた。人工肛門造設や今後の経過や治療に対する衝撃・不安を感じ

【人工肛門造設と疾患過程が不確かな事に対する思い】を抱えていた。術後数日後より食事開始し排便コントロールができたことを実感して、時間経過と共に人工肛門に慣れてくることで【人工肛門の利点を実感】することが出来ていた。ボディーイメージの変容に対する戸惑いや病気や治療への不安に対しては、家族や周囲の人の理解と医療者の存在が支えとなったことから【周囲のサポートへの気づき】があった。退院が近づくにつれてセルフケアの必要性を実感したり、術後療法を受けることを最善と考え治療選択していた。また医療者から情報を得ることで【現状を認知し気持ちを切り替え】ていた。人工肛門管理に自信がつくことで社会復帰のイメージができていた。さらに術後療法の必要性を理解し今後の治療を目標とすることで、自分らしい生活の維持をめざし【人工肛門を保有し治療しながら生活することのイメージ化】を行っていた。

V. 考察

手術直後患者は疼痛がある中で、ドレーンや点滴類

が多く身体的な拘束感があったが、拘束感から解放され身体的苦痛が軽減することで自身の現状に目が向き始めると考える。

祖父江らは「術後3か月では疎外感や不安、恐れを感じながら自分もしくは専門職や周囲の人々の支援を必要とするコーピング姿勢をとってストーマ保有者の自律性が回復している」と述べて¹⁾いた。本研究でも人工肛門が造設されることでボディーイメージが変容し、社会的役割が変更される可能性に対して不安を抱えていたが、周囲の支えや前向きな気持ちを持つことで、自身の疾患と向き合い自分らしい生活を維持したいという思いに変化していた。その思いに至る心理過程には、家族や周囲の人の理解、現状を認知し退院後のストーマケアにむけたセルフケアの必要性の実感と、医療者からの助言を取り入れた対決的対処や、家族の存在や退院を待つ周囲の存在を理解し、ソーシャルサポートを求めている。また治療を受けることを最善と考え選択し、ポジティブな再評価を行うというコーピング行動をとっていた。

患者は術後の身体症状の回復を実感することで、現状に向き合うことが出来ているため回復過程を迎えるように介入する必要がある。また、人工肛門造設後の利点を共有し、肯定的にフィードバックすることで人工肛門の受け入れを促進できると考える。患者は術後、人工肛門造設と術後の治療や経過に対する2つの衝撃・不安を抱えながらも、それぞれの社会的背景、個人の目標に応じて対処行動を行い、不安と向き合っていた。そのため患者の思いや行動を受け止め肯定的に評価することで、患者が対処行動を行うことを支援出来ると考える。

VI. 結論

- 1.人工肛門を造設した大腸がん患者は【人工肛門造設と疾患過程が不確かな事に対する思い】を抱え、【人工肛門の利点を実感】することや【周囲のサポートを実感】することで、【現状を認知し気持ちを切り替え】、【人工肛門を保有し治療しながら生活することのイメージ化】を行う心理過程を辿っていた。
- 2.患者は身体症状の回復を実感することで現状を認知し始め、社会復帰のイメージ化を図り自分らしい生活を維持する自信に繋がることが明らかとなった。

引用参考文献

- 1)祖父江正代他：結腸ストーマ保有者の自己適応過程とそのパターン分析,日本創傷・オストミー・失禁ケア研究会誌 11巻2号 pp41～51,2007
- 2)佐藤栄子：事例を通してやさしく学ぶ中範囲理論入門, p174～181,2005